

磐田市国分寺金堂の階段の敷石はどここの石

柴 正博

昨年の10月に磐田市教育委員会の招きで、磐田市国分寺(図1)の金堂の階段の敷石がどこから運ばれてきたかということについて調査してきました。

国分寺の金堂の石段の敷石に使用されていた石は、貝化石の破片が層状に密集する岩石で、「貝化石石灰岩」とよべるものでした(図2)。以前の報告書では、この岩石は「含化石凝灰岩質細礫岩」と名づけられていましたが、それは貝化石片の粒子の大きさが細礫(2~4mm)サイズで、全体に凝灰質のように見えたために名づけられたものと思われます。しかし、この岩石は、一部に細礫や粗粒砂は含むものの、ほとんどの構成粒子が貝化石の破片であり、凝灰質ではなく石灰質であり、岩石粒子のほとんどが石灰質の貝殻片であることから、石灰岩としました。

この岩石に類似するものを私は、菊川市公文名の奥山中池の南岸で見たことがありました。それは、掛川層群富田層に含まれる貝化石密集層の岩体で、これに類似する貝化石密集層を私はここ以外で見たことがなかったために、とくに印象に残っていました。そこで、今回の岩石産地の現地調査の目的として、まず菊川市公文名に行き実際の露頭で岩石の類似を確かめることにしました。

菊川市公文名の奥山中池の南岸に分布する貝化石密集層の岩石は硬く、国分寺跡金堂跡の石段の石にとっても似ていました(図3)。細礫や粗粒砂も含みますが、ほとんどが碎屑された貝殻の化石片からなり、それらははっきりとした平行葉理を形成しています。それは、強い一方向の流れの中で堆積したために形成されます。この化石密集層はコンクリーショ



図1 磐田市国分寺跡



図2 磐田市国分寺金堂の階段の敷石の岩石

ンされた硬い岩層として厚さ1~2mをもち、砂泥互層中に挟まれています。その砂泥互層の走向傾斜は、N50°W、10~20°Sで、奥山中池の北西岸にも連続して分布しています。後日、その分布を精査した結果、西側の尾根を越えて海老名付近にも分布することを確認しました。

このように碎屑された貝化石破片が密集す

ることは、波浪によりすでに砕かれた貝殻だけが埋積し、その後海底の斜面に沿って流れ下った高密度の重力流、たとえば岩砕流（Debris flow）のような流れによって、やや平坦な海盆に堆積したことを意味します。通常、砂や泥などの堆積する海域では貝殻だけが砕屑されて堆積することはないため、このように貝殻の破片が集積することは砂や泥の堆積がほとんどなかった環境または時期（海進期には一般的に沖合への砂泥の供給は減少する）に形成されたのではないかと考えられます。

掛川層群富田層は掛川層群下部層の最上部層で、後期鮮新世の今から358～309万年前に堆積したと考えられます。この化石密集層は、堆積物の供給が少なくなった海進期または最大海汜濫期（最も海進が進んだ海進の最後の時期）付近（約310万年前）に堆積したと考えられます。また、この化石密集層の分布する場所は、この地域の掛川層群の基盤である倉真層群が分布する南側約1kmにあたり、この付近にも下位の倉真層群が小規模に分布しています。このことから、この石灰岩の堆積した時期に、この地層は岩石海岸の急傾斜の崖の下で、波浪の影響のない水深100m以下の深い海底の堆積盆地に堆積したと考えられます。この「貝化石石灰岩」は、このように特殊な堆積環境と堆積時期が重なって、さらに急崖を流れ下る重力流により形成されたものと考えられます。

掛川層群では、その分布の北部で貝化石密集層を多く見ることができ、とくに掛川市から袋井市にかけての掛川層群上部層の大日層には、貝化石密集層が分布します。掛川層群大日層は、掛川層群上部に含まれ、今から約200万年前に大陸棚の上に堆積した浅海性の砂層または泥層からなる地層です。

大日層は、富田層の「貝化石石灰岩」の層準と同じ海進期（海面上昇期）の堆積層ですが、その堆積環境は遠浅な波浪のある海岸の沖合で堆積したもので、富田層のそれとは異なっています。大日層では化石密集層が多く含まれるものの、貝化石は砕屑されることはほとんどなく、コンクリーションされた化石密集層の厚さも数10cm程度です。また、大日層またはその上位の土方層の分布域にも公文名で見たような「貝化石石灰岩」の分布を



図3 菊川市公文名の化石密集層の岩石

今までに私は確認していません。

このことから、金堂跡の石段の敷石は菊川市公文名付近から運搬されたものと考えられます。「貝化石石灰岩」は平行ラミナが発達していて、そのラミナに沿って割れやすく、板状の石材を切り出すことが容易にできます。また、運搬方法については、河川を船で下り、菊川水系から海に出て、河川を利用したものと思われる。

国分寺は、奈良時代の中頃に、仏の力で国を安定させるために聖武天皇によって諸国に建立が命じられたものです。磐田市の国分寺も金堂を中心に七重塔・講堂・中門・回廊などの伽藍が配置されていました。国分寺の建立や維持には、その時代のその地域の広い英知と最新の技術が結集されたと考えられます。

以前に、私はやはり磐田市国分寺の壁の漆喰に掛川層群の火山灰層が使用されていることの解明をお手伝いしたことがあります。その火山灰層は、有ヶ谷Ⅳ火山灰層で、それは御前崎市新野付近に分布しています。

このように、磐田市国分寺の建立には、その当時の遠州地域全域の自然についての知識と人材と技術が総動員されて、素晴らしい建造物が建立されたと想像できます。

この「貝化石石灰岩」の新鮮な表面はまっ白で、貝殻片がきらきらと光り輝いています。「貝化石石灰岩」は寺の本殿へ上がる階段の敷石として使用されていて、その美しく輝く岩肌は開寺された当時の国分寺の美しさをより引き立たせていたものと思われる。